

抄 正定滅度

一．題意

正定聚は現生で信一念のときに往因満足して就く位をいうのに対して、滅度とは阿弥陀仏の浄土に往生して直ちに得る仏果をいい、現生・此土で得るものではない。

正定聚の利益は現生・此土で得るのに対して、滅度の利益は来生・彼土で得るのであって、現生・此土で得るものではない。

二．出拠 大経巻上 第十一願文(註 P17)

「設我得_レ仏、国中人天、不_下住_二正聚_一必至_中滅度_上者、不_レ取_二正覚_一」

三．釈名^{しゃくみょう}：「釈名」とは、名目(教義概念)を解釈する意、教義概念規定をいう。文言の定義である。

「正定」とは、正定聚の略で必ず成仏することが決定している仲間をいう。

「滅度」とは煩悩を滅し迷いの海を度る(仏の悟りを開く、仏果を得る、成仏する)ことをいう。

四．義相^{ぎそう}

(一)現生正定聚の意義と根拠

他力信心^{かいぼつ}開発(信一念)の時、往因満足し正定聚に入る利益を得る。

「獲_二得金剛真心_一者、横超_二五趣八難道_一、必獲_二現生十種益_一。何者為_レ十。一者冥衆護持益_レ…中略…十者入_二正定聚_一益也」(『現生十益』全 2-72、註 P17)。

正定聚の利益は、聖教上も現生の事態とある。(『大経』「弥勒付属」全 1-76、註 81)。

「若有_二衆生_一、聞_二此経_一者、於_二無上道_一終不_二退転_一」

(二)正定聚と滅度について

正定聚の位には現生で信心獲得即時に就くのに対して、滅度は当来に浄土往生して得るのであって、両者は峻別される。

「獲_二往相回向心行_一、即時入_二大乘正定聚之数_一。住_二正定聚_一故、必至_二滅度_一」(『証文類』[1]全 2-103、註 307)

滅度は、往生と同時の事態である。

「念仏衆生、窮_二横超金剛心_一故、臨終一念之夕、超_二証大般涅槃_一」(…横超の金剛心を窮むるがゆゑに…『信文類』三(末)便同弥勒积、全 2-79、註 P264)

(三)浄土の正定聚

浄土の正定聚は、滅後の菩薩の姿を示す^{こうもんじげんそう}広門示現相(従果降因とも)である。

五．結び

浄土真宗の利益は、現生・此土の正定聚、来生・彼土の滅度であって、両者は峻別され、現生・此土で滅度を得るわけではない。

来生・彼土の正定聚は滅後の菩薩の姿を示す^{こうもんじげんそう}広門示現相である。

以上